

10. 三滝本町地藏尊(歯痛地藏)

衆生、悟りのひらけない庶民を救ってくださるという地藏尊、子どもたちのよい友だちであり保護者であるといわれるお地藏さん。人びとの切なる願いを見つめてきた親しみあるお地藏さん、季節の移ろいの中でひっそりとたたずむお地藏さんは私たちの心のよりどころです。



この地藏尊は今の場所から北東約400mのところの道端にありましたが昭和30年(1955年)太田川放水路掘削工事時に近隣の人の手により現在の位置に移されました。

毎年のように洪水に見舞われ、自然の猛威に打ちひしがれた農民たちが、人の力の及ばない自然の力を畏敬(いけい)し、安寧(あんねい)を求めて高い石垣の上に安置しました。



地藏堂

また地元では歯痛地藏といわれ、隣の地藏松の葉で痛む歯を突いてお願いすると、痛みが治まるといわれています。

平成8年(1996年)から広島市による三滝地区整備事業がすすみ、地藏堂を移築することになりました。お堂の老朽化が進んでおり、現在の景観を保ちつつ昔ながらの工法により新たに建立することにしました。その時、明治8年(1875年)4月近郷の人びとによって建立されたことが分かりました。

平成13年(2001年)8月に三滝本町地藏堂保存会が、三瀧寺住職を導師として盛大に落慶法会を行いました。

11. 軽便鉄道 可部線

可部線の始発地横川の地名は、太田川(通称本川)の本流から広島城の西北西で天満川が分かれて西に向かって流れる、すなわち横に流れることからこの名が付いたと言われています。



江戸時代から雲石街道が通り、また太田川を利用した船運によりこの地に多くの木材が集積し、昔は多くの材木屋が立ち並んでいました。今でも楠木の大雁木が残っていますが、昭和の初期には現在の何倍も長さがある雁木が写真で確認されています。

明治30年(1897年)9月に山陽鉄道の広島—徳山間が開通し、横川駅が完成、明治42年(1909年)には後に可部線と呼ばれる私鉄の軽便鉄道が横川—祇園間に開通しました。明治44年(1911年)までに横川—可部間が軌間762mmの蒸気軌道で開通しました。その後、昭和3年(1928年)に電化、昭和5年(1930年)

には軌間1067mmに改軌し、昭和44年(1969年)には三段峡まで延長されました。

この可部線の建設までには多くの問題が発生しました。「大日本軌道広島支社」が国産の角サドル機関車を使用して当時の中原(現可部)まで開業、その後同社は解体し大正8年(1919年)にこの経営を「可部軌道」が受け継ぎました。



大日本軌道・終着駅の三篠駅は山陽鉄道横川駅より約70m北東の位置にありました。大正8年(1919年)3月可部軌道が設立され、大正15年(1926年)5月電化を目標に「北の横川、東上郷中原、大久保、大平内、三池原(現三滝)、一本木(現在は太田川放水路の中)」のルートに軌道を切り替えました。これを受けて、昭和5年(1930年)元日新式の電車が運行を開始しました。それに伴い三篠駅を廃止し、現横川駅の北側に可部線の横川駅を作りました。その後、昭和11年(1936年)9月にこれを「日本国有鉄道」が吸収して同社の可部線になりました。

終点が現在の横川駅の位置になったのは昭和37年(1962年)の事です。

昭和62年(1987年)4月1日付けで民営化に伴いJR可部線になりました。可部一三段峡間は、住民による廃線反対の運動もありましたが平成15年(2003年)11月30日をもって廃止されました。



明治38年(1905年)2月バス開業式



バスのはなし



この軽便鉄道より6年前、明治36年(1903年)に瀬川貞吉氏が日本最初のバスを運行すべく申請しました。当時は交通規則もなくバスと客馬車との衝突事故が発生していましたので、この申請を留保していました。明治37年(1904年)1月に広島県令第3号自動車営業取締規則が制定されたので、その規則の一部を下記に書いてみます。

「速度制限は市街地で一時間二里、村落で四里に制限、牛馬車に対しては左側に避け、軍隊や砲車に対しては右側に避けること。郵便車に対しては進行に障害を与えないように停車すること」など肩身の狭い自動車の姿が偲ばれます。

自動車が日本に初めて姿を現したのは明治33年(1900年)のことで、大正天皇のご成婚記念としてサンフランシスコの日本人会からお祝いとして届けられました。

瀬川氏は明治34年(1901年)には四人乗りのオールズモビルを購入しており、広島のに自動車が姿を現したのは比較的早かった事実があります。

明治37年(1904年)12月にバス運行の開業宣言をし、可部までを六区間とし、一区間乗車賃四銭、往復四十五銭であったと植木新之助の日記に書かれています。

12. 太田川放水路



太田川河川事務所提供



広島市の中心部は太田川デルタの上に形成されています。このデルタは、太田川が運んでくる砂の堆積によって、多くの恩恵を受けるものの、古くよりその氾濫にも悩まされ続けてきました。その氾濫を防ぐために作られたのが、太田川放水路です。

まずその太田川について説明します。広島県西部を貫流する中国地方有数の河川で水源を中国山地の広島・山口県境に発し、広島市安佐北区可部町付近で根谷川、三篠川を合流します。その後広島デルタを南南西に流れ、広島旧市街地の上流端で西に太田川放水路を分流し、太田川（通称本川）は中央部ではさらに京橋川、天満川、猿猴川、元安川を分流して広島湾に注いでいます。流域面積は1,700km²、幹線流路延長は103kmです。戦前までは舟や筏を利用して山間部と広島市街地との生活物資を運搬していました。干満の差が大きいので多数の雁木（荷揚場）が作られました。

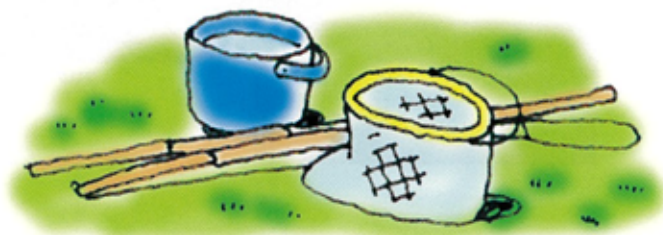
23ヶ所の水力発電や灌漑用水として沿川7,000haの農耕地に農業利水の恩恵を与えているほか、高瀬堰（有効貯水量178万m³）により、都市用水を供給しています。

このように多目的な利用によりわれわれの生活に多大な恩恵をもたらすと同時に、豊富な水量と急峻な流れは、下流域においては洪水被害をたびたび引き起こしてきました。

そこで度重なる水害を防ぐために、山手川と福島川を1本の流れにして、強固な堤防と広い河川敷を持つ防災用河川として昭和7年（1932年）から太田川放水路の建設工事が開始されました。太平洋戦争で一時工事は中断しましたが、最大幅400m、延長12kmの放水路は昭和42年（1967年）に35年の歳月を経て完成しました。それ以降旧市街地は一度も洪水の被害を受けていません。

太田川放水路は自然の川のように見えますが、実は広島で最大の河口部を持つ人工の川です。河口部からは、夕日に映える宮島も望めます。

太田川放水路は上流からの水量のうち、最大放水量の2/3を処理し、残りの1/3を旧来の5つの河川に流して、広島市の安全を確保しています。



現在では、災害防止の目的以外にも広島市民の憩いの場としても活用されています。三滝橋東側には、河川敷の一部を掘り込み、親水性を持たせたり、竜王橋東側にはカヌーの着水場もあります。また、週末には河川敷の駐車場も解放されて臨時トイレも設置され、家族連れでバーベキューや釣りなどを楽しんでいます。



アユ

三滝橋付近の太田川放水路は、汽水域であり季節によりさまざまな魚貝類がいます。夏は夜釣りでスズキやセイゴ、最近ではクロダイ(通称チヌ)も釣れます。秋には釣り大会が開催されるほどハゼがよく釣れます。ボラやウグイ(通称イダ)も釣れます。太田川上流でふ化した天然のアユやアマゴが海に下り、そして再び川を上る道にもなっています。



ボラ

クロダイ

ハゼ

三滝橋から少し上流の山本川から祇園水門にかけては、広島では珍しいニゴイ(マゴイより細長く、口ひげはない)が釣れます。

河川ではありますが干満の差はかなりあり、干潮時にはシジミ採りを楽しむ家族の姿も目にします。



シジミ(財)広島市農林水産振興センター水産部提供

魚だけでなく、このように豊富な魚を狙うカワウやアオサギ、コサギなどの姿も目にします。

ヒドリガモ、オナガガモなどの冬の渡り鳥や夏の渡り鳥のコアジサシなど季節ごとに珍しい鳥たちも見るすることができます。



アオサギ



カワウ

13. 三滝山と登山コース

三滝山 古くは植松山 標高356m

上田宗箇(そうこ)(1563~1650年)は、元和5年(1619年)、広島藩主となった浅野長晟に従って広島に入国した武将で、また、優れた茶人でもありました。宗箇は、広島城、縮景園、上田家上屋敷などに茶室・露地を設け、その借景として、広島城から約5km離れた北西の山の山頂に巨大な松を植えました。この松は「宗箇松」と呼ばれ、山は三滝山(宗箇山)として親しまれるようになりました。



三滝案内板

JR横川駅から可部線で次の三滝駅で下車、坂道の参道を十数分登ると三滝寺境内の想親(そうしん)観音堂前にある登山コースの案内碑に到着します。その道沿いに、春はサクラの並木とツツジ、初夏はアジサイ、秋は見事なモミジ、冬はサザンカ、ナンテンと四季を通して楽しめます。



JR可部線三滝駅



山頂へのコースはAコース、Bコースがありますが、登りは本堂経由のAコースを紹介します。

鐘堂の下をくぐって本堂に向かって境内を登って行きます。数多い石仏、磨崖仏、お地蔵さんや茶堂と補陀落の庭、三鬼権現堂、鎮守堂、そして三つの滝(幽明の滝、梵音の滝、駒が滝)があります。

本堂の横の石段を登り左に行くと登山口です。堰堤(えんてい)を越えると静かな山道に入ります。ゆっくりした登りで間もなく竹林があります、途中からやや急勾配になりますが15分位でなだらかな小尾根に出ます。さらに少し登ると右側が開けてきます。鉄塔のあるところで振り返ると市街地の一部が見えます。

明るい尾根を、どんどん行くと小鳥と風の音だけが聞こえます。やがて「左、高峠山(少年の家コース)」「右、三滝山」の案内標識があります。ここまでが約25分、右の尾根道へ進むとアカマツ、ホウノキ、アラカシ、ニセアカシア、ウラジロ、コシダなどの樹木に名札がつけてあり、初めてでも楽しめます。

大茶臼山への分岐をさらに直進し、クロモジ、アセビを眺めながら登り下りを繰り返し平らな尾根を過ぎると山頂です、登山口から約1時間です。



山頂からの展望



山頂からは広島市街はもちろんのこと、宮島など瀬戸内海の島々が一望できる素晴らしい眺めが堪能できます。

下山はBコースを通ります。少し急な坂を数分下ると楽な道に変わり、山の向こう側に市街地が現れ、大芝水門が左前方に見えます。



三滝山(崇徳山)の山容

岩場に気をつけて下っていくと双子の大岩があり、眺めを楽しむには絶好の場所です。

さらに下って行くと、再び小鳥の鳴き声が聞こえてきます。下山開始から約25分「左・長東」への分岐を直進、鉄塔を右手に見ながら、小鳥の群れともお別れして歩いて行くと大きな分岐にでます。

「左・長東」、「右・三滝Bコース」の案内標識があり、直進すると大原山(標高224m)に行きますが、ここでは右に行きます。笹の藪が左右にある道が終わるとツバキの木が目立つようになります。どこからか水が流れて来て、せせらぎをつくっています、間もなく三滝ライオンズ山荘の前に出ます。山頂から約50分でBコースの入り口に着きます。

あとがき

このプロジェクトは平成16年9月号西区民だよりの「三滝地区の魅力いっぱい」の自然や歴史にふれあえるガイドブックを一緒に作成しよう。三滝歴史コース:募集人員10人」の呼びかけで始まりました。

第一回の会議が平成16年10月26日に開催され、参加者は女性3名を含む16名、アドバイザーに歴史研究家の村岡幸雄先生を迎え、西区役所の職員2名を加え予想を大きく上回る参加人員でスタートしました。参加者には三滝本町の住人が多く、三滝寺の歴史が勉強できることに興味を感じて参加した人もいました。

ガイドブック作りの経験がない人がほとんどで、三滝地区について何をどれ位書くのか、完成したガイドブックはどんな大きさをページ数をいくらにするか、記載内容は文章、写真、スケッチをどの程度入れるか全くの手探りでした。

三滝地区の歴史を語る上で、最も歴史のある三滝寺の境内・建物・石仏・滝、それらの配置とそれぞれの歴史を説明しました。しかし、過去数回土石流が発生するなどの災害を受け、貴重な古文書が流失したため詳細がわからない物も多くありました。またこの地区も昭和20年の原爆により多くの資料が消失してしまいました。

それでも、三滝寺のみならず参道沿いにある誓願寺などの寺社や太田川、可部線まで含めた歴史を約3年間でまとめました。

三滝地区を訪れた時に、是非このガイドブックを参考にしながら楽しく散策して頂きたいと思います。

最後に本ガイドブックの編集に当たり三滝寺の住職 佐藤元宣氏のご協力を得ましたことに心から感謝の意を表します。

平成19年10月

群れおふる楓もみちを
漏るる日に
谷の苔道ほのかに匂ふ
わがつひの欣栄ほのほど
なりて燃ゆ
人よ麗わしくせよ平らけく

山本康夫

わが心つはなのわた
のとぶ如く
はなら散らさむ光のなかに

山本紀代子

世をかへすおほきかの
みなぎらふ
デルタ雪晴れていつくしま
見ゆ

丸山敬雄

参道の石碑(石文)の代表作品

■アドバイザー 村岡 幸雄(歴史研究家)

■ボランティアメンバー

川崎 博行 土井 寛 山根 敏弘
栗栖 教二 長尾 照夫 山根 伍
土井 史郎

→ 参考文献 ←

・紙岡町誌 ・図説広島市史 ・広島市の文化財
・広島電気軌道 ・日本の軽便鉄道 ・JR全線全駅
・駅長さんが書いた駅名ものがたり ・佛教大事典
・広島県神社誌 ・三篠沿革史 ・三篠郷土史
・広島市史 社寺編 ・ふるさと歴史散歩
・芸備の伝承 ・日本の淡水魚 ・講談社大百科事典
・宗箇松物語



発行年月 | 平成19年(2007年)10月
企画・編集 | 三滝歴史ガイドブック作成ボランティア
発行 | 広島市西区役所区政振興課
〒733-8530 広島市西区福島町二丁目2番1号
TEL (082) 532-0927 FAX (082) 232-9783
E-mail: ni-kusei@city.hiroshima.jp
改訂年月 | 平成22年(2010年)11月



編集・作成/三滝歴史ガイドブック作成ボランティア
印刷・発行/広島市西区役所